

## 悲しみとの遭遇

—サガン再読—

清 家 浩\*

### 目 次

- I. 設定—プルーストとエリュアール
- II. シャルマン・モーンストル—セシルの造形
- III. アンヌ—幸福の破壊者としての
- IV. セシル—矛盾する存在
- V. まとめ

18才の学生で世界的ベストセラー『悲しみよこんにちは』 *Bonjour tristesse* を出版し、スキャンダラスな伝説にまといわれ、自由奔放な女として生きた、われわれにとって同時代の女流作家フランソワーズ・サガン Françoise Sagan（本名フランソワーズ・クワレ Quoirez）が69才でこの世を去ったのは、2004年9月24日のことである。

死後一周年を前にした昨年の夏休み、熱意溢れるフランス語学習者にしてフランス文学愛好家の市民グループと、週2回合計16回で彼女の処女作『悲しみよこんにちは』を原文で輪読するクラスをスタートさせた。フランスの出版社から注文した文庫本が届き、参加者に配布してまもなく、7月18日、符節を合わせたかのごとくに、NHK 衛星第2放送の「時の旅人」と題するシリーズドキュメンタリー番組がサガンを取り上げた。出家した元作家瀬戸内寂聴がライバルとも同類ともみなす彼女の足跡をたどり紹介していく趣向である。瀬戸内がサガンの一人息子ドゥニと共に、サガンが暮らしたパリの住居、彼女が愛した公園を訪れ、思い出を語り、借金と契約関係の複雑さ故に相続は放棄するだろうとの彼の見通しを告白させ、又、サガン来日の折の自身との対談の映像を見せ、あるいは、生地で幼馴染みに幼い頃の

---

\* 広島経済大学経済学部教授

サガンを偲ばせ、第2次大戦、68年5月革命時の作家の姿勢を喚起し、あるいは、パリのカフェで（サガンゆかりの『カフェ・ド・フロール』!）、サガンの最新の伝記作者と会見する。1時間にわたり、サガン像が余すところなく多角的に示され、挿入される作品の引用と共に、愛と孤独の、ひとりサガンのみならず、不倫・離婚を経験する瀬戸内自身のテーマが浮かびあがり、最終的に、存在の孤独というより普遍的テーマを寂聴の涙によって示す秀れた番組であった。

そして、8月7日、宮城地震の翌日、読売新聞のコラム「編集手帳」に窪田空穂の歌が引用される。「哀しみは身より離れず人の世の愛あるところ添ひて潜める」。人々の不意を襲う災害が引き起こす感情に筆者は思いを寄せたのであったが、その文脈を離れば、この歌はまるでサガンの作品の注釈と見まがうばかりである。

さらに、テキストを半ば以上読み進んだ9月2日、『悲しみよこんにちは』を翻訳し、その翻訳によって翻訳家としての地歩を築いた、日本へのサガン紹介者朝吹登水子が他界する。そして、サガンの一周忌、24日木曜日、講読クラスは予定どおり『悲しみよこんにちは』を読了する。

こうした因縁話めいた連鎖の中で読み終えた作品と「時の旅人、フランソワーズ・サガン」のビデオは、本学の講義「フランス文学の世界」最終回でもとりあげた。18才にして何億もの金を手に入れ、スピードと恋愛とギャンブルとドラッグに生命をかけ、一方、書くことを生のバックボーンとしたこの人物の映像と17才の夏の物語は、受講生達に、他の古典作品とは異なる衝撃を与えたようにみえた。

しかし、世界で150万部売れたというこの作品を、その通俗性の中に埋もれたままにしておいて良いのだろうか。18才の小娘が書いたインモラルな小説という話題性の上に、この作品の見所は存するのだろうか。サガンの生涯も、作品と作者にまわりつく偏見と誤解も、事後に起こることがらであって、成立したばかりの作品とは無関係なはずである。昨夏以来の一連の関わりの延長上で、この作品『悲しみよこんにちは』を、無垢な状態のまま、文学テキストとして、虚心に再読することは意味のあることと思われるのである。

## I. 設定—プルーストとエリュアール

ソルボンヌのプロペ（教養課程試験）に落ちた直後、1953年18才の夏、再試験に備えるかわりに、フランソワーズは、南仏逗留中の家族から離れてパリにもどると、一気に作品を書きあげる<sup>(1)</sup>。そして、翌54年1月6日、タイプ打ちされた原稿が出版

(1) 一連の伝記的事実は、Jean-Claude Lamy, *Sagan*, Mercure de France, 1988, 及び、Geneviève Moll, *Madame Sagan*, Ramsay, 2005, に依る。

社に持ち込まれる。<sup>(2)</sup>

彼女の原稿を受け取ったジュリヤール社とプロン社の動きは素早い。前者の受け付け嬢は包みを上司に渡す。原稿は文芸担当者にまわされ、彼から社長ルネ・ジュリヤールに新しい才能の発見が伝えられる、と同時に、社で最も厳密な読み手へと原稿は渡る。直ちに報告書が作成される一方、自ら原稿に目を通したジュリヤールは、今、貴重な才能を手に入れようとしていることを確信する。と同時に、この同じ瞬間、同じ原稿を読むライバルを想定して居ても立っても居られず、電話を取りあげ、作者に送るべき電文を伝える。が、彼女はランデブーの時間に姿を見せない。「社長は本日中に会いたいです」との秘書からの電話は、睡眠中をたてに、誰も取りついでくれない。改めてランデブーを取ることを余儀なくされたジュリヤールは、それでも、フランソワーズとの契約にこぎつける。<sup>(3)</sup>

同じ1月6日、同時に草稿を受け取った300m先のプロン社もこの18才の娘に真の作家の才能を認め、ジュリヤール社と同じ動きを見せていたのだが、機敏さが身上のこの新興の出版社を率いるルネ・ジュリヤールの商才がプロン経営陣のそれを上まわった。

そして、出版された『悲しみよこんにちは』はその年の「批評家賞 le prix des Critiques」を受賞する。第1回目(1946)はカミュの『ペスト』、翌55年の受賞作がロブ＝グリエの『覗く人』という重厚な文学賞である。

### ブルーストの影

サガンという名が、フランソワーズがブルーストの作中人物から借りてきたペンネームであることは周知のことである。クワレ家の名前が世間にさらされることを恐れた両親が偽名の使用を作品出版の条件としたのである。<sup>(4)</sup>

ペンネームを思案する時に、ブルーストの『失われた時を求めて』をたまたま開いたことからもうかがえるように、ブルーストはサガンの愛読する作家の一人であった。彼女に強い影響を与えた書物としては、13才の時のジード作『地の糧』、14

(2) 朝吹登水子の「ひっそりしたパリにとじこもってタイプを打ち終ったサガンは、同じ日に原稿のコピーを一流出版社5社に置いてまわった」の記述は事実と反する。『ボーヴォワールとサガン』、読売新聞社刊、1964、P. 232。また、その先で、サガンは2ヶ月半で作品を書きあげたとあるが、『世界文学の名作と主人公』（自由国民社、1991、P. 80）では、「18才のときに、3週間で書き上げた『悲しみよこんにちは』云々」となっている。Lamyでは1ヶ月である（前掲書、P. 29）。伝説化はこのように進むらしい。

(3) Lamy, 前掲書, P. 11 sq. Moll, P. 83 sq.

(4) Lamy, PP. 20-21.

才時のカミュ作『反抗的人間』、16才時のランボー作『イリュミナシオン』があげられるが、プルーストは別格である。プルーストへの親しみ、それは、2年後に出版される次作『ある微笑』*Un certain sourire* のプルーストに直接言及する文章によってもうかがわれる。

「今、リュックの頬に自分の顔を押しあてる時、私は、アルベルチヌの頬を長々と語るプルーストが理解できる。」<sup>(5)</sup>「このことについてはプルーストの一文がある。『幸福がそのもととなった欲望にぴったり重なり合うことは非常に稀だ』<sup>(7)</sup>」

プルーストは、ヒロインの女子学生ドミニック、そして、作者サガンの指南役のような具合である。が、プルーストが「すべてを教えた」とは、己れの体験、作中人物の感情や心理をプルーストの作品のそれと比較対照するといった意味のみにはとどまらない。サガンが最初の小説を書き出せずにいた時、プルーストの作品は大きなヒントを与えたに違いないのである。

「その夏、私は17だった。そして私は完全に幸福だった。」とサガンは書き出さない。夜明け前の闇の中でベッドに横たわって、私は、私の内部から湧きあがる感情、自己の存在の暗部の感触にじっと注意を凝らしている。「ものうさと甘さとがつきまとして離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しい、りっぱな名をつけようか、私は迷う。」(朝吹訳)それは、ちょうど、夜中に目覚めて、回想の糸をたぐる『失われた時を求めて』の話者と同じ姿勢なのだ。時と場所が移り、一つの過去が語られ、もう夜明けの光が射そうかという回想する現在にもどってくる『コンブレ』のそれと同一のこの構成は、又、全体の組み立てとも合致する。《Longtemps》で始まり、最後、《dans le Temps》で終る『失われた時を求めて』の円環性は、冒頭の最初の文の《tristesse》が、最後に、《Bonjour tristesse》でしめくくられる『悲しみよこんにちは』と完全に重なる。このプルースト的枠組の設定によって初めて、<sup>(8)</sup>「その夏私は17だった」で始まる物語は動き始める。そして、安易な書き出しを自らに禁じる創作態度はサガンに幸いした。託された原稿に目を通したジュリヤール社の文芸部長ピエール・ジャヴェは、何よりも、書き出しが、

(5) 《Proust dont elle dit qu'il lui a tout appris》「私にすべてを教えたと彼女が語るプルースト」Lamy, P. 89.

(6) Françoise Sagan, *Un certain sourire*, Pocket (Julliard), P. 74.

(7) Ibid. P. 110.

(8) 朝吹の報告。「『悲しみよこんにちは』については小説の構想は長い間頭の中で練っていた… 始めの書き出しはちょっと苦心したがあとはすらすら出てきたと(サガンは)言っていた。」前掲書 P. 222. プルースト的インシピット(冒頭)のサガン風書き換えがその苦心の中味だったと考えられる。

「清々しいある春の朝、美貌のX中尉は栗毛の愛馬を軽く走らせ、城を離れていった…」といった絞切り型でない点を評価したのであったから。<sup>(9)</sup>

そして、ヴェネチア。病院の待ち合い室でセシルが見つめるヴェネチアのリトグラフ。<sup>(10)</sup>だが、なぜ、ヴェネチアがセシルの恐ろしい空虚感と結びつくのであろうか。鍵は『失われた時を求めて』第6編、『消え去ったアルベルチヌ』の中のヴェネチアにある。アルベルチヌの失踪、落馬事故による彼女の死の知らせに次いで、進行する忘却の最終地点を示す場、それがベネチアであった。誤読された電報のエピソードは、苦悩と愛の対象であった女性に今や私が完全に無関心であること、即ち、彼女が虚無と忘却の淵に沈みこんだことを示している。そのことを示すために選ばれたのがイタリアの水の都である。そして、少女期のサガンをプルーストに引きよせたのが、故郷カジャルクの祖母の雑然たる蔵書中の、この『消え去ったアルベルチヌ』<sup>(11)</sup>だったのである。

かくして、病院のリトグラフのヴェネチアの象徴するものは、プルーストの話者にとってのアルベルチヌ同様、セシルにとってのアンヌも忘却と虚無に呑みこまれる宿命にあるということである。プルーストの人物は、事故とも自殺ともつかない落馬事故で死亡し、話者は母と向きあう。サガンの人物は、事故とも自殺ともつかない自動車事故で死亡し、セシルは父と向きあう。そして、両作品において、早晚、死者は忘れ去られていくのである。

### エリュアール

作品構成に対するプルーストの影は否定しようもない。そのプルーストが目指したのは、生きられたがままの生の再構成、すべてを覆いつくす忘却と回想のメカニズム、一言で言って、時の作用の解明ということであったが、では、サガンの場合はどうなのであろうか。人生の総決算にあたろうとするプルーストに対して、サガンはやっと人生の出発点に立ったばかりの18才の学生である。彼女が現実から収穫しうるものはまだ無いと言ってよい。ある17才の少女の一夏のエピソードを想像し、作品化するとして、そこに込められるものは何なのであろうか。この作品の意味上のヒントは、もはやプルーストによってではなく、エリュアールによってもた

(9) Lamy, P. 12.

(10) Sagan, *Bonjour tristesse*, Pocket, P. 149. さらに, P. 153 でこのリトグラフが回顧される。《Ce vide terrible que j' avais ressenti dans cette clinique devant la lithographie de Venise.》なお、本文中の引用に付した頁は、この版のものである。

(11) Moll. P. 49.

らされる。

《悲しみよこんにちは》*Bonjour tristesse* のタイトルは、直接、エリュアールの詩から取られたものであって、出版された作品には、エピグラフのように、詩集『直接の生』*La vie immédiate* 所収の一編の詩が全文掲げられている。

Adieu tristesse	悲しみよ さようなら
Bonjour tristesse	悲しみよ こんにちは
Tu es inscrite dans les lignes du plafond	天井のすじの中にも お前は刻みこまれている
Tu es inscrite dans les yeux que j'aime	わたしの愛する目の中にも お前は刻みこまれている
Tu n'es pas tout à fait la misère	お前はみじめさとはどこかちがう
Car les lèvres les plus pauvres te dénoncent	なぜなら いちばん貧しい唇さえも
Par un sourire	ほほ笑みの中にお前を現わす
Bonjour tristesse	悲しみよ こんにちは
Amour des corps aimables	欲情をそそる肉体同士の愛
Puissance de l'amour	愛の強さ
Dont l'amabilité surgit	からだのない怪物のように
Comme un monstre sans corps	誘惑がわきあがる
Tête désappointée	希望に裏切られた顔
Tristesse beau visage	悲しみ 美しい顔 <sup>(12)</sup>

(朝吹登水子訳)

しかし、なぜ全文を示す必要があるのでしょうか。それは、この作品が、『悲しみよこんにちは』のタイトルの出所を表わすだけでなく、作品の本質部分をも又示

(12) 他に、嶋田晨訳（『エリュアール選集Ⅰ』飯塚書店、1972、PP. 95-96）、高村智訳（『ポール・エリュアール集』土曜美術社、1983、P. 28）、宇佐見齊訳（『エリュアール詩集』小沢書店、1994、PP. 37-38）等があるが、これらの後の訳よりも、朝吹訳の方が、総じて奥行きのある訳になっている。他が「告発する」と訳す6行目の *dénoncent* も、朝吹は、適切に、「現わす」と訳している。付言すれば、原タイトル *A peine défigurée* については、それぞれ「女が変わるときたちまち」、「いささか変形されて」、「わずかに顔をゆがめて」と訳されているが（サガン巻頭では原題は示されていないため朝吹は省略している）、ほとんど変形されないままであるものこそが「悲しみ」という女性名詞ととるべきではなかろうか。

しているからではなかろうか。特に、二つめの *Bonjour tristesse*（8行目）以下は、作品を照らしだす句となっている。他の訳で、「愛すべき肉体の愛」とか「好ましい肉体たちへの愛」と訳されている *Amour des corps aimables* は、セシルと父の性向を決定するものである。次の3行も同様に、醜さを嫌悪して軽佻に傾く父と、肉体的魅力を欠いた人の前で気づまりや無関心を感じるセシルの注釈<sup>(13)</sup>と取れる。そして、最後の2行は、セシルが最後に見た、悲しみの淵源となるアンヌの顔そのものではなかろうか。<sup>(14)</sup>

かくして、サガンは、タイトルばかりでなく、物語の核となる部分をもこの詩から取り出した。ブルーストが回想を語りつつ時を描こうとしたとすれば、サガンは、17才の夏の物語を語りながら、悲しみへと焦点をしぼっていくのである。小説が詩の注釈になるとも、詩が小説の前奏曲になるとも言えようか。作品はエキセントリックな一少女の平板なバカンス物語に終らず、微妙な心理的陰影を加えてより深みを増す。

しかし、読者の関心は、作者の年齢と内容の反道徳的大胆さに向けられる。原稿の採否に関わる報告書を出したジュリヤール社随一の読み手、フランソワ・ル・グりでさえも、サガンの筆力に太鼓判を押す一方で、タイトルは『悲しみよこんばんは』の方が良くないかと、珍妙な提言<sup>(15)</sup>をしている。セシルが悲しみに向かいあう時間を、作者は「明け方」(à l' aube) とはっきり言っているにもかかわらず、夜 (le soir) と思い込んだミスからだが、それは、エリュアールの詩を、彼が完全に無視したことを物語っている。文学的類縁は一顧だにされなかったのである。先ず、売れる売れないを考える出版事業者にとって、作品の出自など全く関心の外だったということであろうか。

## II. シャルマン・モーンストル―セシルの造形

語りの枠組が設定され、物語の収斂する地点が定めれば、残るは、登場人物の性格づけと効果的なプロットの運びが問題となろう。例えば、半年の後に、主人公セシルが「悲しみよこんにちは」とつぶやくためには、夏の物語中の彼女は、悲しみ

(13) 《Sans partager avec mon père cette aversion pour la laideur qui nous faisait souvent fréquenter des gens stupides, j' éprouvais en face des gens dénués de tout charme physique une sorte de gêne, d' absence.》 *Bonjour tristesse*, P. 14. 《Moi, si naturellement faite pour le bonheur, l' amabilité ...》 PP. 64–65.

(14) 《Et moi ... ce visage, ce visage, c' était mon œuvre.》 Ibid. P. 144, 《Et ce visage qu' elle avait, ce visage ...》 P. 145.

(15) Lamy, PP. 13–14.

を感じたことのない人物として、当然、提示されねばならない。

それでは、セシルはどんな女の子だったのか。彼女は父と二人暮らしである。母親のいないセシルは、母との死別を悲しまなかったろうか。いや、物語の冒頭、父は15年来やもめでであると紹介されるのであれば、当時彼女は2才、悲しみを感じる能力はない。彼女の人生の実質的始まりは、物語世界内においては、去年の夏の出来事を回想する現在から見て、3年前のことにすぎない。彼女は寄宿舎を出て父と合流する。寄宿舎で小説に読みふけり、現実世界をも自分のロマネスクな夢の一部と見紛えて破滅するボヴァリー夫人とは違って、セシルが読書した形跡はない。何もない田舎に帰って行って空想にふけるしかなかったエンマ・ボヴァリーに対して、セシルが帰っていくのは楽しみが待つ大都会パリだった。車に乗り、新しい服を買い、レコードを買い、本を買い、花を買う。映画や演劇を見て、カフェで友人と議論し、キスくらいはするボーイフレンドを待つ。夜は、父と共に社交生活を楽しむ。こうした楽しみをまかなうだけの十分な財力を有する父は、髪を三つ編みにして野暮ったい服を着た娘を、またたくまに、パリ生活のぜいたくに慣らしていく。「私はいまだに、こうした安易な快楽を恥じてはいない…。悲嘆や神秘的な発作なら後悔し否認もするであろうが。快楽と幸福に対する嗜好は私の性格の唯一貫した面を表わしている。<sup>(16)</sup>」

その上、金持ちで健康でハンサムで女たらしの、6ヶ月毎に異なる女性と同棲する父は、自らの行動を娘に隠したりはしない。誇示するわけではないにしろ、無反省なまま、こうした恋愛沙汰をごく当然のこととして娘に受けとらせる下地を作っていく。

このようにして、セシルは、特異な生い立ちによって、悲しみや道徳とは無縁な人物に作り上げられている。全く世間知らずだったこのブルジョワの娘が、刺激的な新生活、なかんずく、父親を通して示される男女関係から、どんな人生観を持つかは想像にかたくない。17才にして、すでに、彼女は人生を、人生の虚無を理解した気である。彼女が絶対的な確信をもって信奉するのは、オスカー・ワイルドの次の警句である。「罪こそが現代世界に残された唯一生彩ある色彩だ」(P. 29)。セシルは、「自分の生がこの句を範とし、それから着想を得、そこからほとぼり出る

(16) 《Je n' ai pas honte encore de ces plaisirs faciles ... Je regretterais, je renierais plus facilement mes chagrins ou mes crises mystiques. Le goût du plaisir, du bonheur représente le seul côté cohérent de mon caractère.》 P. 27.

だろう」と信じているのだった。<sup>(17)</sup>

バカンスに出発する前のセシルとは、すでに、以上のような人物だったのである。父と娘のバカンスに父の愛人が割って入ろうと、そこには何らの気づまりもない。物語はこのように始まる。「この夏、私は17才で、私は完全に幸福だった。《他人》は父と父の愛人エルザだった。」(P. 11)が、この南仏の別荘の3人だけの調和的な静穏は1週間も経ずして壊れさろうとする。シリルの出現とアンヌの到着である。

若さを敬遠して大学生連中に関心がなかったセシルは、滞在6日目に出会った法科の大学生シリルに好意を持つ。何よりも、彼がラテン的な美貌の持ち主だったからである。しかし、彼女の唇を奪い、肉体関係を持つ25才の彼と、成り行きに身を任せる受け身の17才の彼女と、どちらがよりインモラルであったろうか。彼女の状況、父—愛人—娘の共生は彼を憤慨させていた。彼女もこの状況に苦しんでいるに違いないという彼の予測に反して、セシルそのものは何らのショックも感じていない(PP. 20-21)。接吻したことを律儀に謝るシリルに対して、セシルの方は何のわだかまりも感じていず、むしろ、彼の大仰な態度に驚いている。そして、年上の彼は自分を女たらしと考えているんだなと思うと、笑いださずにはいない(P. 32)。先で、結婚を申し出るのもシリルであって、彼の善良さ、細心さ、徳義心は、セシルのシニスムと対照的である。彼女にとって、倫理道德は何ら快樂のさまたげとはならない。<sup>(18)</sup>シリルは、セシルの「快樂と幸福に対する嗜好」に奉仕するだけの存在である。アンヌの死によって幕を閉じるバカンスの終りにセシルは思う。「私は決して彼を愛したのではなかった。私は彼が良い人で魅力的だとは思った。私は彼が私に与える快樂を愛した。でも、私は彼を必要とはしていない。」(P. 150)。

シリルが初めてセシルの前に現れた日、3人の平和をかき乱す役割を負ったもう一人の人物の到来が父によって告げられる。かつて、父が、寄宿舎を出たばかりのセシルを預けた亡き母の友人アンヌ・ラルセンである。離婚して自由の身で父と同じ年代の彼女は、しかし、父及びセシルとは対極の価値観の持ち主である。肉体よりは知性を、放埒よりは思慮を尊ぶ彼女が、セシルにとって、どのような存在になるかは容易に予測できる。セシルの自由を拘束し、規範を押しつけることによって、彼女を反抗へ、はては罪の方へ、オスカー・ワイルドの警句の実証の方へ向かわせる存在が彼女である。

(17) 《Je croyais que ma vie pourrait se calquer sur cette phrase (=cette formule d' Oscar Wild), s' en inspirer, en jaillir ...》 P. 28.

(18) 「私達の接吻には後悔も恥辱もなかった。私は完璧な幸福とくつろぎに満たされるのを感じていた。」 P. 33.

二人の人物の登場によって、セシルの本質を明らかにしてゆく装置は設定された。が、彼女が悲しみからは程遠い存在であることを示す他の副次的側面をさらに見ておくべきであろうか。例えば、バカロレア試験の準備で哲学の勉強をするべきところを、閉じこもった部屋ではタバコをふかし、ジャズのレコードを聴き、ヨガの教則本に従ってポーズを取ることにしかしていないのに、食卓では、午後の勉強の成果であるかのようにカントやパスカルの名を口にする (PP. 98-99)。嘘と不誠実も彼女の性格を成す。そして、彼女の攻撃性にも触れておかなければならない。セシル達をお茶に招いたある日の午後、シシルの母は、未亡人としての困難、母としての困難を語る (PP. 42-43)。つましい、が、堅実で心正しいシシルと母の組み合わせはちょうどセシルと父の像の正反対であって、むしろ、多くの家庭像を代表するものであり、だからこそ、セシル父子の異常さを映す鏡になっているのであるが、この母として妻としての義務を果たした女性を、セシルは侮辱的な言葉でおとしめる。「娼婦の義務」を果たしただけだ。姦通の不安や心配を免れて、何もしなかったことを誇っているだけだ云々。どこまでも、彼女は道徳性の欠けた人物として提示される。あるいは、又、サン・ラファエルの酒場で旧知のウェブ夫妻と談笑する時、セシルはウェブ夫人と衝突せずにはおかない。もともと底意地の悪い海千山千の夫人と相対してセシルは決してひけをとらない。「あなた、漁師連中に恋人がおりなの。」「ええ。」「で、よく釣れるの。」「マクローの専門じゃありませんけど、釣りはしますわ。」 (PP. 120-121) 夫人の悪意の問いかけを受けて、逆に、彼女は、マクロー (さば、淫売宿の主人) の語で、夫人の怪しげな男関係を痛烈かつ絶妙な自然さであてこすっているのである。

17才のセシルのプロフィールはざっと以上のようなものである。その人間性を欠いた性格は、まさしく、モーリヤックが作者フランソワーズ・サガンに呈した「モーンストル」(怪物) の名にふさわしい。彼、モーリヤックは『悲しみよこんにちは』を一読して、サガンを「18才のとんでもない怪物」*charmant monstre de dix-huit ans* とも「恐るべき少女」*terrible petite fille* とも呼んだのであった。このカトリック作家は、しかし、サガンを非難したのでは決してなかった。それどころか、逆に、世間の非難に対して、彼女を擁護さえしたのである。「そこには、最初のページから才能が横溢している。この作品には若さ故のあらゆる闊達さと大胆さがあり、しかも、いささかの下品さもない。明らかに、サガン嬢は、この作品が引き起こす非難に何らの責任も負ってはいない。そして、こう言えようか (彼女の次作がわれわれを裏切るのだから)。われわれの前に一人の作家が誕生したの

だど。」<sup>(19)</sup>

### Ⅲ. アンヌ—幸福の破壊者としての

父とエルザとセシル 3 人の平穏な幸福をかき乱しにやって来たのはアンヌである。だが、ドラマの発端となるこの人物を、なぜ、父は自分達の別荘に招待するのであろうか。亡き妻（セシルの母）の友人で、一時セシルの養育に関わったとはいえ、日常の交際もなく、父娘とかけ離れて静かで知的で、馬鹿騒ぎの嫌いな、彼らの生活を軽蔑しているに違いない女性を、しかも、愛人同伴の休暇にである。かつての母代わりとして、娘の教育への悪影響を非難されかねないとの考えは浮かばなかったのであろうか。定見の無さがこの父の本性であった。<sup>(20)</sup>しかし、アンヌは、彼らの対極にある人物として、又、そうであるが故に、ここに、絶対に登場しなければならぬ。作品がそれを要請する。

一方、無神経なだけの父、仲間がふえることを単純に喜ぶエルザにひきかえ、セシルはすでに波乱を予感している。アンヌが来る知らせに「私は目を閉じた。私達はあまりに平和すぎる。そんなことが長続きするはずはない。」(P. 15) 冒頭でセシルを感じる「完全な幸福」の状態、3 人の人物の一体性は、アンヌによって解体されていくだろう。

ところで、その一体性はどんなものだったろうか。精神的な価値を認めず、金を与えてくれる楽しみにふける父と娘はあらゆる面で一心同体であって、娘は父のすべてを受け入れている。逆に、父は娘を自己の同類とみなし、自分の生活スタイルの鑄型にはめこんでいる。セシルにとって、父以上の親友、父以上にくつろげる人はいないし（《Je n' imagine pas de meilleur ami ni de plus distrayant.》 P. 12）、父は娘を共犯者とみなしている（《Mon vieux complice. Que ferais-je sans toi?》 P. 17）二人の間には近親相姦的といって良い雰囲気濃厚に漂う。しかし、この幸福の三角形の一角エルザはどうであろう。父の愛人という資格だけでセシルと彼女の間に一体感は生ずるであろうか。彼女らの間には、先ず、若さという共通点がある。ハンサムな男性に弱い、考えることが苦手等々の類似点に加え、父がセシルに好んでファム・ファタル（妖婦）的粧いをさせることによって、体の作りは全く違うのに、二人の女は似通う雰囲気を持つことになる。<sup>(21)</sup>二人の間にはさしたる会話

(19) Moll, 前掲書 P. 97 における引用。

(20) なぜアンヌを呼んだのか、エルザのことを考えたかという娘の質問に、父は、「考えなかった。本当だ、これは大変なことだ。セシル、パリへ帰ろうか。」と返答する (P. 17)。

(21) 次頁へ掲載。

もなかったのだが、ある時、エルザはセシルにこう断言している。「私達いつもよく理解しあえたわ。だって、私達いくつも共通点があるんですもの。」(P. 78) 3人の共同生活において、そもそも、父娘を疲れさすことがないというのが何よりエルザの美点であって (P. 12)、セシルの幸福にとって、それは必要かつ十分な条件であった。

別荘到着の翌朝、アンヌは、浜辺で、3人のうかがう視線に頓着せず、平然と、ガウンを脱ぎ捨てる。すると、そこには、40才を過ぎたと思えぬ、細くしまった胴、完全な脚、長年の注意と手入れの結実とも言うべき、ほとんど衰えを見せぬ肢体が露わになる (P. 33)。一方、エルザはというと、肌は赤く日焼けし、皮がむけ、オイルを塗りたくった惨憺たる状態であった。アンヌは自分よりはるかに若いエルザに、肉体的に、決して負けてはいないのである。三角形の頂点の位置から二人の女を見下ろす父の様子に、セシルは、直観的に、父のアンヌに対する欲望の目ざめを感じとっている。「恐らく1週間もたたないうちに父は…」(P. 34) 戦略的な面でもアンヌは抜け目がなかった。会話の中でエルザがどんな馬鹿なことを言おうと、それにつけこんで、彼女を笑い者にすることは決してなかったし、彼女に対しては極度の愛想良さを示していた。自分の知的優越を示すよりも、その態度はより一層父に対しては有効であった (P. 37)。父が感じる彼女への感謝の念は彼女へのアプローチのより自然な口実となろう。そして、アンヌの控え目、アンヌの沈黙は彼女の価値を高めた。<sup>(21)</sup> 衰れなエルザは彼の心変わりには気づかない。ある日、それでも、彼の視線でそれと気づいて、精一杯、アメリカ映画の一場面のような演技を試みても (P. 38)、もう、とり返しはつかない。そして、遊び女としての本領を發揮できるとエルザが心待ちしたカンヌ行きは、皮肉にも、決定的に勝負を決めた。出かける前の階段の場面がこの帰趨をすでに象徴している。「私は正確にあの場面を覚えている。私の目の前の前景にはアンヌの黄金のうなじと非の打ち所がない両肩、少し下方に、手を差しのべた父の眩惑された顔、そして、エルザのシルエットはすでに遠くにかすんでいた。」(P. 47) 勝利したのはアンヌで、エルザはセシルに別れを告げて別荘を去っていく (「セシル、私達あんなに幸福だったのに」P. 52)。

(21) 《Mon père, soit par goût, soit par habitude, m'habillait volontiers en femme fatale.》P. 45. その直前、《Elle (=Elsa) pensait retrouver sa personnalité de femme fatale.》Ibid.

(22) 《Ils (= ses silences) formaient avec le pépiement incessant d' Elsa une sorte d' antithèse comme le soleil et l' ombre.》P. 38.

さて、最初のアンヌの登場場面にもどってみよう。セシルが初めてシ ril と接吻を交わし、その感覚に陶然となっている時、突然クラクションが鳴りひびいて、二人はまるでこそ泥のように相手から身を離す。まだ到着するはずもないアンヌが（父とエルザが駅へ迎えに行っているはずだ）車からおりてくるのであった（P. 21）。浜辺の光景を見たはずはないのだが、結果として、アンヌはセシルの行為に警告を発した形となる。が、それは偶然のことではない。別のある日、夕方6時、半ば裸のセシルとシ ril が松林の中で、夕日を受けてたわむれている時、セシルを官能的なものから引き離すアンヌの声が再び響くのであるから。恥じ入って立ちすくむシ ril に向かってアンヌは言う。「もう、あなたにお会いするつもりはありません。」（P. 60）勿論、セシルに対しても、彼に会わないようにとの命令は下る。彼女の抗弁も役に立たない。このようにして、セシルの夏の滞在の幸福を作りあげていたもう一人の人物シ ril が追放される。セシルの幸福な世界が、闖入者アンヌによって浸食されていく。亡き母の友人であって、一時彼女を預かった母親代わりとしての彼女の義務とも権利とも言えるかもしれないが、かくして、アンヌは禁ずる人、命ずる人となるのである。

到着の翌日、朝食のテーブルで、アンヌはすでにこう言っていなかったであろうか。「セシル、あなた食べないの。…人前にはあと3キロ太らないといけないわ。…さあ、タルチヌを取ってきなさい。」（P. 31）そして、同じ日、昼前の浜辺の会話では、セシルのバカロレア試験が話題になって、「すべっちゃった」と答える彼女に、アンヌは、「10月には受からないといけないわ、絶対に」と強く言う（P. 34）。「なぜ。自分は決して免状など取ったことはない。だが、豪勢な生活を送っている。なに、娘は良い結婚相手を見つけるさ…」と父が助け舟を出してくれても空しい。夏休みの勉強が大切と主張するアンヌの前に、セシルのバカンスは輝きを失っていくだろう。

エルザが去り、シ ril には会えず、勉強を強制される状況に落ちこんだ娘を、娘と一心同体の父は守り続けていくだろうか。

ところが、エルザからアンヌへのこの父の心変わりは予想外の結果を生む。それは、単に愛人の交代では終わらない。勝敗を決めたカンヌの夜の翌朝、父とアンヌは、結婚するつもりだとセシルに宣告する（P. 55）。結婚や束縛を嫌っていた（半年毎に愛人を変える）父が一夜にして態度を変えることが、娘には、先ず、理解できない。が、父・エルザ・セシルの三人の組み合わせからエルザが抜けてアンヌに置き換わることが、完全に質的な変動を引きおこすことは明白である。安逸から秩序へ、無為から勤勉へ、猥雑から洗練へ。セシルは、当初、この変化を受け入れたように

みえる。知的で洗練されたアンヌ的生活の展望に、それ自体を拒む理由はない。むしろ、セシルはそのスタイルを羨むことさえあった。しかし、3人が心楽しく思い描く新生活も所詮は空中楼阁にすぎない。父同様に、娘も生の方針を転換できれば問題はないが、彼女があくまで現在の自分自身であることに固執すれば、そして、アンヌの価値観と自分のそれとの両立不可能性を自覚すれば、彼女も又、決断を迫られることになる。自分が変わるか、アンヌを変えるか。しかし、この時、父はどうなのか。アンヌと結婚する父は娘擁護の立場に立てるのであろうか。

アンヌがセシルにシジルとの交際を禁じた時、意見を求められた父はアンヌの正しさを認める。勉強なんて必要ないと前にはセシルの肩を持った父が、結婚の決意を固めた今は、目を伏せて、「あなたが恐らく正しい。セシル、おまえは少しは勉強しなくちゃいけないよ。」と述べて、孤軍奮闘、アンヌに反論する娘を完全に見捨てる (P. 63)。刹那の満足よりも将来の堅実さを求めるアンヌ的価値観に父は染まった。父はセシルから離れようとしている。「父が食卓で見せた気づまりそうに逸らした視線が私につきまとい、私を苦しめた。」(P. 65) 父はアンヌの軍門にく(23)だった。娘は裏切られたのである。

このようにして、アンヌはエルザを追い出し、シジルを遠ざけ、父と娘を己の夫と娘に変えようとする。彼女がバカンスの招待に応じた理由、結婚を決意した理由は明らかにされなくても、ともかく、彼女の行動の基本線は以上のようなものである。セシルの永続的な幸福を心から願いながら、そして、そのための努力を積み重ねつつ、アンヌは、夏の浜辺の現実において、セシルの幸福の恐るべき破壊者なのである。セシルがそれでも幸福であり続け、自分自身であり続けるためには、アンヌと闘い、父を取り戻すことが絶対に不可欠である。2部構成のこの作品の前半部はセシルとアンヌの闘争の不可避性を示すためにある。

#### IV. セシル—矛盾する存在

父と娘の共犯関係は終わった。そして、今や、セシルもアンヌに操られようとしている。そのことを自然に受け入れ、「半年もすれば、私はもはや抵抗する気もうせるだろう。」(P. 65) だが、あの2年間の自由と幸福はどうなるのであろう。いや、「絶対に、父と私達の以前の生活を取り返さなければならない。」(Ibid.) しかし、知性と厳しさとやさしさを同時に行使するアンヌに抵抗することはたやすいことで

(23) 《Tu ne m' aimes plus comme avant, tu me trahis.》 P. 66.

はない。かつては、思うがままに、その時の気分しだいで、気ままに安楽に暮らしてきたセシルが、今や、自分自身を見つめるといってかつて経験したことのない事態に立ち至る。「私は内省のあらゆる苦悩を味わった。」(P. 71) 自己を正当化しようとする自我、それを否定する自我、この否定する自我こそが間違っているのではないかとする意識。まるで思考しないことを本性としたセシルが、今や、八方ふさがりの状態で、内省と自我の分裂を経験している。しかも、沈黙し観察する以外の手立てを持たない。しかし、アンヌを排除する手段がないなら、セシルの方からこの紐帯を断ち切って自由になってはいけないのか。現に、シリルは彼女に結婚を申しこんでいる。しかし、この提案が顧慮されることはなく、17才の少女の限界か、父との共生こそがすべてと言うのか、一人立ちの考えがセシルの脳裏に浮かぶことはない。彼女は、まさしく、形を与えられる粘土、鑄型を拒否する粘土(《Je n' étais rien qu' une pâte modelable, mais celle de refuser les moules.》 P. 66) の受身な存在でしかなく、かつて寄宿舎を出て容易に父の鑄型に成型されたように、行い正しいアンヌの娘に作りあげられてゆくことは目に見えている。

こうして、沈黙のうちに憔悴してゆくセシルに新たなチャンスを与えるのが、荷物を取りに戻ったエルザである(P. 78)。再び美しさを取り戻したこの若い女は、アンヌを打ち破る武器になるのではないか。そして、夫となるべき男性が他の女と誤ちを犯すことになれば、潔癖なアンヌはそれを許しておくはずがない。アンヌに正面から挑んでうまくいかないならば、側面から父を攻撃すれば良いのである。肝心なことは、窮屈な生活を強いるアンヌが消えてなくなることである…。セシルの悪魔的偽りと内的矛盾が浮かびあがるのはこの点からである。アンヌを「蛇」と呼ぶ彼女が自らそそのかす「蛇」となる。

セシルは、瞬時にして組立てた案に沿って、エルザにこう吹きこむ。父はアンヌの策略で結婚を承諾したが、本当に愛しているのはあなたエルザである。子供のように騙されやすい父を、あなたは守り、救い出す義務がある、と(P. 79)。しかし、どのようにして。筋書きはこうである。エルザはシリルと恋人同士をよそおって父の自尊心と嫉妬心を煽る。父はまちがいがなくエルザの再征服に駆りたてられる。1回切りのことで、アンヌへの愛は変わらないと父が考えても、アンヌは許しておかないだろう。セシルは父をよく知っている。片棒を担ぐシリルがこの計画をどんなに邪悪とみなして尻込みしようと彼は拒否できない。「このような術策を僕は好まない。だが、君と結婚するためのそれが唯一の手段というなら、僕はそれに乗ろう。」(P. 90) このようにして、はるかに年上の二人の人物は17才の怪物に完全に丸めこまれる。彼らを遠ざけることによって彼女の幸福に邪魔立てしたアンヌに、当の彼

らを使って復讐するのである。

ヨットに乗る若々しい新カップル、手をつないで通りを歩くこの美しいカップルが3人の前にしきりに出没する。会うことを禁じたシリルが、直後に、かつての父の愛人エルザとかくも簡単にくっついてしまったことにアンヌは心を痛める。可哀相に、セシルはどんなに傷ついていることだろう。こうして、アンヌがセシルに善意といたわりを傾注する時、セシルはアンヌに不幸の不意打ちを食わせるべくこの卑劣なお芝居を演出しているのである。衝動を押さえきれずに、父は、最終的に、あのいわくつきの松林でエルザを抱くことになる。アンヌはそれを目撃する。セシルの計画はもの見事に成功する。彼女の悪魔的な計算に狂いはない。しかし、彼女は冷酷にまっしぐらに目的に突っ走っていったらどうか。敵を倒しそのことに満足するであろうか。事はそのようには運んでいない。セシルのアンヌとの闘いは、実は、セシル内部の闘いでもあった。

早くからセシルは母代わりのアンヌに恐れを抱くと同時に賛嘆の念も感じていた。<sup>(24)</sup>彼女が自分達父子からすべてを奪いとろうとすると感じて、心の中で呪詛の言葉を浴びせる時でも、はっと我にかえって、次の瞬間、恥かしさに青ざめて心の中で彼女に許しを乞うてもいる (P. 73)。あるいは、勉強のことで言い争った浜辺で、まだ興奮にうち震えているセシルの首筋にアンヌの手が置かれた時のセシルの安堵感は何を意味するのか (P. 76)。反発しながらセシルはやはりアンヌを求めているのではなかろうか。彼女があの不吉な計画を立てる直接のきっかけとなったバカロレア試験を巡る対立の直後、セシルは、一瞬、計画を放棄するのではないかと思わせる。「たっぷり2時間の勉強、10月の合格、父の馬鹿笑い、アンヌの賞賛、学位。私は知的で教養があって少し達感している。アンヌのように。」 (P. 85) 彼女は心を入れ替えて勉強する可能性もあったのである。手本は、勿論、父ではなく、アンヌである。又、エルザに計画の説明をする時、セシルは彼女を仲間とみなしているようにはみえない。彼女の魅せられた様子にセシルは吹きだしたくなるし、逆に嫌悪を覚えている (《Elsa, dis-je, car je ne la supportais plus.》 P. 81)。そして、エルザとシリルがますます計画実現に深入りしてくればくるほど、セシルは計画から逃げだしたい衝動に駆られるかのようなのである。ただ、彼女には、父のアンヌへの愛が固くて不貞はすまい、万一、作戦が成功しそうになれば、二人の共犯者を操って作戦を中止に持っていけるという目算はあった (P. 93)。エルザもシリルもセシルの道具であって、彼女の指示なしには何らの行動も取れないはずなのだから。す

(24) 《Si elle m' intimidait, je l' admirais beaucoup.》 P. 16.

べてを操るのは恐るべき少女セシルなのである。しかし、彼女は揺れ動く。ある時は、敗れた方がいいのではないか、茶番はさっさと切り上げて、自分の生涯を最後までアンヌの手に委ねた方が良くはないかと考える (P. 95)。他方、一たび侮辱されたと感じると、エルザに対する父の欲望をかき立てようと躍起になる。その時、「アンヌの顔はもはや私を悔恨で満たすことはない。」(P. 137) しかし、揺れ動くセシルの気持がどうであれ、動き始めた筋書きは、一個の宿命のように、進行することをやめなかった。

罪深い結末を招いたのはすべてセシルのせいである。しかし、過剰な自意識から、真に彼女の幸福を思い、唯一父を救う資格を持った何の罪もない女性アンヌを死に追いやる残酷さ、罪深さの背後に、彼女のためらいや廉恥心が存在していたことも又事実である。反抗しつつ従順で、憎みながらも心引かれ、暴力的であって無力、邪悪な計画の成功を願いつつ成功を恐れる彼女は、決して一つの状態にはとどまっていない。無為と快樂を求めてはいたが罪を求めたのではなかった。彼女が邪悪な存在の追放だけを望んだ単なる怪物であれば、彼女は勝利に酔うだけで、悲しみに出会うはずはないのである。

ところで、日論見通りアンヌが去って、父とセシル二人が差し向いになる時、かつて2年間の生活で二人が作りあげた陽気さと幸福は戻ってきたであろうか。そこには、みじめさと空虚しかない。勝利が実は喪失であった。二人はアンヌに許しを乞う手紙を書く。愛情と悔悟と希望のまじった手紙。が、それは彼女のもとに届くことはない。アンヌは、事故とも自殺ともつかない形で、断涯から車ごと墜落して、二度と帰ることはなかったのだから。

シリルとエルザはもはや不用の存在である。こうして、バカンスは幕を閉じて、父と娘は何事も無かったかのように出発点にもどる。確かに、1ヶ月の間は、彼らは寡夫と孤児のように生きた。が、程無く、アンヌは忘れられ、セシルは新しい男友達を見つけ、父は新しい愛人を作る。そして冬が近づく。セシルはかつてのセシルにもどっている。しかし、早朝の車のクラクションを聞く時、夏の思い出がよみがえらずにはいない。そして、その時、明け方の薄暗がりの中で、セシルは彼女の名をつぶやく。「アンヌ。アンヌ。」セシルはかつてのセシルにもどったかもしれない。しかし、かつてのセシルの知らなかった感情を知っている。この悲しみという感情。セシルはモーンストルではなかったのである。

## V. ま と め

エリュアールの詩句《悲しみよこんにちは》は作品のテーマと人物(特にセシル)

の造形を決定づけた。悲しみを知らない、モラルの面で怪物的人物を作りあげ、それに、悲しみを感ずる感受性を与えなければならない。自己肯定と自己否定をあわせ持つこの人物の魂の矛盾する相のすべてを明るみに出すためには、この怪物に匹敵する、いや、それを凌駕する人物をも創造し、反発と共感のうちに両者を対決させねばならない。セシルは目的を達して父親と共に自由と安逸の生をとりもどすが、それでも、セシルが悲しみの感情を味わうためには、敗北したアンヌが無意識界に押し込めることが不可能な程に鮮烈な理想と価値を示し、セシルの心に刺さった棘として残らねばならない。そして最後のアンヌの絶望した顔はセシルが失う善の可能性すべての象徴であり、悲しみの淵源となるのである。

かくして、この作品は17才の少女の性的体験とインモラルな性格を表現する風俗小説ではない。二つの生き方のせめぎ合いを示す、深く、心理的、倫理的作品と云う。経験の表出ではなく、計算され構築されたものであって、あえて言えば、セシルは主役でさえない。彼女は「悲しみ」を浮かび上がらせるプリズムでしかない。カトリックの立場に立つモーリヤックがサガンを評価したのは、反道徳的な快楽と自由を主張するかにみえる人物に、きちんと悔改めの契機が与えられていることを見てとったからではなかったろうか。セシルの悲しみとはそういうものであった。「シャルマン・モーンストル」の評言は、18才の無名の新人のこの非凡な造形力に対するノーベル賞作家からのオマージュではなかったか<sup>(25)</sup>。サガンはこのセシルの物語を直線的時間の線の上においては語らない。自己の経験を語るプルースト的話者の視点を通じて、昨年の夏と今回想して執筆する二重の時間の往復運動の中に表現した。

作品は、しかし、すぐれた心理小説という風には取られなかった。作品を冷静に客観的に評価するには作者の存在は、同時代の読者にとって、あまりに近すぎた。18才という年齢と反ブルジョワ道徳的内容に世間の耳目は集った。この処女作に関する 1.4 kg に及ぶ記事の切り抜き中、真実に触れるものは3つしかないと言

(25) アラン・ロブ＝グリエの評言は又別である。伝統的小説否定の立場に立つ彼は、自分の作中人物とサガンのそれとは質的に同じだと断ったうえで、サガンの心理小説としての深さを遺憾なものとしている。彼に言わせれば、サガンは平板性を追求すべきだったのである。が、ともかく、『悲しみよこんにちは』で示された作者の稀有な才能は認めている(《*Bonjour tristesse promettait une œuvre plus importante dans l'histoire de la littérature.*》)。L'EXPRESS, 1965年10月11日号のインタビュー記事。Lamy, P. 221 における引用。

自身が嘆くほどの過熱ぶりである。1957年の『悲しみよこんにちは』映画化の際、監督オットー・プレミンジャーは作者サガンにセシル役を打診してすげなく断られ、オードリー・ヘプバーンに交渉する。内容にショックを受けたヘプバーンは「これほど不道德なシナリオの役は絶対演じたくありません」と答える。エル *Elle* 誌の公募にはブリジッド・バルドーの妹を含む1500枚の応募写真が集ったが、プレミンジャー監督の気に入るものはなく、お蔵入り寸前だったシナリオは、18才の女子学生ジーン・セバーグの偶然の出現によってやっと日の目を見る。父=デビッド・ニーブ、アンヌ=デボラ・カー、エルザ=ミレーヌ・ドモンジョの配役で撮影はスタートする。<sup>(27)</sup>

かくして、『悲しみよこんにちは』は、現象としては、文学の世界を離れた。出版界とショービジネス界に多くの利益をもたらし、逆に、そこから莫大な金銭をえたサガンの人生は、作中人物セシルの人生がそうありえただろうものとなる。17才のセシルは言っていた。「私は30才の自分を見る。アンヌよりも私達の友人に似た自分を。」(P. 127) あるいは、「彼女(=醜悪なウェブ夫人)の年になったら、私も又、若い男達に金を払って私を愛させるだろう。なぜなら、愛は最もやさしく、最も生き生きとした、最も道理あるものなのだから。代価なんて問題ではない。」(P. 124) 現実にサガンの人生はそのようなものとなろう。サガンは自分の生から『悲しみよこんにちは』を作り出したのではなかった。そうではなく、『悲しみよこんにちは』が彼女の生を作ったのである。

---

(26) Lamy, P. 127.

(27) Ibid. PP. 173-175.